

第 37 回 日本動物児童文学賞審査委員会の会議概要

I 日 時 令和 7 年 7 月 29 日 (火) 14 : 00 ～ 15 : 00

II 場 所 日本獣医師会会議室及びWEB 併用

III 出席者 (*はWEB 出席)

【委 員】

動物福祉・愛護部会長

佐 伯 潤 日本獣医師会理事 (動物福祉・愛護部会長)

動物福祉・愛護関係省庁及び教育関係省庁関係者

石 川 拓 哉 環境省自然環境局総務課動物愛護管理室長

藤 枝 秀 樹* 文部科学省初等中等教育局視学官

動物福祉・愛護関係学識経験者

浅 利 昌 男 公益社団法人日本動物福祉協会顧問

田 畑 直 樹 公益財団法人日本動物愛護協会理事長

成 島 悦 雄 井の頭自然文化園元園長

公益社団法人日本動物園水族館協会顧問

金 谷 和 明 公益社団法人日本愛玩動物協会常務理事

【日本獣医師会】

伏 見 啓 二 公益社団法人日本獣医師会専務理事

IV 議 事

- 1 委員長の選任 (協議)
- 2 第二次審査に至るまでの審査経過等 (説明)
- 3 審査 (協議)
- 4 その他

V 会議概要

伏見専務理事から、各委員に対し、ご多忙の中第二次審査にご協力いただいたことへの感謝とともに、挨拶が述べられた。

1 委員長の選任

委員の互選により、佐伯委員が委員長に選任された。

2 第二次審査に至るまでの審査経過等 (説明)

事務局から、資料に基づき、応募状況、第一次審査、第二次審査の経過等について

説明された。昨年度に引き続き、本年度も、一般社団法人日本児童文芸家協会に第一次審査の業務を委託し、同協会の常務理事である横田明子氏を委員長、おのみつこ氏を副委員長とした有識者 18 名で第一次審査委員会を設置し、応募された 122 作品の中から 15 作品を第二次審査候補作品として選出した旨報告された。

3 審査（協議）

各審査委員による審査候補作品の事前審査結果をもとに、協議の結果、別紙のとおり大賞 1 作品、優秀賞 2 作品、奨励賞 5 作品が選定された。

4 その他

- (1) 第 38 回日本動物児童文学賞第二次審査委員会の資料送付について、事務局からこれまで全委員に対し、データおよび印刷物の両方を送付していたが、紙資源の削減および作業負担の軽減の観点から、今後は希望者にのみ印刷物を送付することが提案され、了承された。

併せて、これまで印刷物は片面印刷で対応していたが、紙資源の有効活用のため今後は両面印刷とする案が提示され、これについても了承された。

- (2) 第 38 回日本動物児童文学賞の募集要項の公開時期について、事務局から、これまで募集期間開始日（1 月 1 日）以降に募集要項を公開していたが、情報を得てから応募するまでの期間が短いのではないかという指摘を受け、次回からは公開時期を前倒ししたいと提案された。

具体的には、第 38 回日本動物児童文学賞作品募集要項については今回の審査結果公表後、準備が整い次第公開する方向とし、作品募集のポスターについては、動物愛護週間関連行事褒賞にて推薦された作品からポスターに使用する絵画を選出する関係上、早くても秋頃の公開となる見込みであることが説明され、本提案については、異議なく了承された。

- (3) 委員から、今回から募集要項に加えた AI ツールの使用に関し、「実際に AI を使ったと思われる応募作品はあったか」との質問があり、事務局から、言い回しが不自然であったり、通常の変換では出てこない漢字（例：学→學、獣→獸）が用いられている作品があり、AI ツールを使用した可能性があると判断したケースがあった旨報告された。なお、該当する作品については、指摘の上で著作者に再提出を求める対応を行った旨説明された。

5 まとめ

- (1) 大賞、優秀賞受賞者の表彰は、令和 7 年 9 月 23 日（火・祝）に東京国立博物館・平成館にて開催される令和 7 年度動物愛護週間中央行事屋内行事の会場において行う。
- (2) 大賞及び優秀賞の 3 作品は本文を、奨励賞の 5 作品は作品名と著作者名のみを「第 37 回日本動物児童文学賞受賞作品集」に掲載し、製本のうえ、都道府県等の関係機関、小学校等の教育機関及び図書館等に配布する。

第 37 回日本動物児童文学賞入賞作品

【日本動物児童文学大賞】

「春をよぶシャッター」

にし の 桃子（愛知県）

<受賞理由>

主人公・アキラのように、「助けたい」思いがあっても、現実的な制約から行動に移せずにもどかしさを感じたことがある人は少なくないだろう。

それでも諦めることなく母親を説得し続け、里親探しのために人付き合いが苦手な自分と向き合いながら、行動を重ねていくアキラの姿からは、目的のために苦手なことにも挑戦する勇気の大切さが伝わってくる。

著者の猫の保護活動での実体験を基に、説得力とリアリティを持って描かれているため、動物との関わりの中で、人との繋がりや自己発見につながる過程が一層鮮明に描写されている。

また、動物と暮らすことで心が豊かになり、前向きな変化が生まれる様子が、動物を迎えることの魅力を改めて感じさせてくれる作品である。

【日本動物児童文学優秀賞】

「ロクを見つけた日」

渡部 麻実（千葉県）

<受賞理由>

主人公・浩介が猫を見つけた場面や、傷ついた猫の様子、さらに母のお気に入りカーディガンで汚れた猫を包むことをためらう気持ちなど、状況や心情の描写が細やかで、物語への没入感を高めている。

助けても不自由な体で暮らさなければならないことや、最期まで介護が必要であることを話す場面では、命を救うことの責任と現実の重さに気付くことができる重要な場面となっている。

また、大人になると現実を考えて純粹に助けたいという気持ちだけでは行動できなくなる中、自分は冷たい人間なのかもしれないと感じる母親の気持ちに共感する大人の読者も多いのではないだろうか。

命だけではなく獣医療に関しても深い学びにつながる貴重な作品である。

「わたしはインターン」

さいだ・としひろ（三重県）

<受賞理由>

主人公・さやかがペットショップの店長になる夢を持ち、特別に叔母の店でインターンとして一週間働くことになる。地道で手間のかかる作業や、動物への細やかな配慮を通して、飼い主としての責任を学ぶ過程が丁寧に描かれており、学びの一つ一つが段階的に積み重ねられているため、読みやすく理解しやすい作品となっている。

作品内では、動物販売業に関する規定や飼い主として事前に備えるべきことが紹介されており、適正な飼養の大切さを伝えるうえで有用な内容となっている。

本作が入り口となり、読者が自ら調べたり考えたりするきっかけとなることが期待できる作品である。

【日本動物児童文学奨励賞】

「ピンクがピンクに染まったら」

お一た みか（愛知県）

＜受賞理由＞

主人公・文乃は、姉の綾香、両親とマンションで暮らしている。綾香は血統書つきの仔犬を飼いたがるが大型犬のため断念することに。その後、出先で野良の子猫と出会った文乃はその子を飼いたいと提案するも綾香に却下される。子猫が心配で立ち去りがたい文乃のもとに同級生の河合が現れ、河合のおかげで子猫は無事ボランティア団体に保護される。子猫を迎えたい文乃は河合から命を迎え入れることの意味を教わる。

尊い命を迎え入れることは、「可愛いから」という理由だけでは不十分で、覚悟や責任が伴うことだと、物語の中で自然と学ぶことができる。また、保護猫ボランティアがどのように動物のために働いているかについても理解を深められる作品となっている。

姉の態度の変わり様は幼くも見えるが、その素直さが猫への印象の変化を効果的に表現している。

「お化けじゃないぞ」

小川 かをり（東京都）

＜受賞理由＞

めんどくさがり屋で自己中心的な性格の主人公・田茂は、ある寒い早春の夜、寒くて眠くてこたつから出るのが嫌で、うさぎの寝床ヒーターを入れることを怠った。翌朝、年老いたうさぎが死んでいるのを発見する。

田茂は深い自責の念に苦しむが、死んだうさぎが夢に現れて「いつでも田茂の胸の中にいる」と伝えてくれたこと、小学校の庭でボランティアをするおじいさんとの共同作業、友達の新井との会話を通して、自分を責める気持ちと和解していく。最終的に田茂は、今生きている動物たちの世話を責任もって行うことで償いを始める。

子どもの等身大の弱さと後悔、そして悲しみを乗り越え成長した姿を丁寧に描いている。自己中心的な行動による結果に対する責任感の芽生え、命の重さを学ぶ過程が描かれているが、うさぎという存在が持つぬくもりや魅力を取り入れることで、ネガティブな感情だけに偏らないよう工夫されている。

「豆助になったクロ」

朝日 ひかる（岩手県）

＜受賞理由＞

主人公・勇太は、学校の閉校や親友の転校で寂しい思いをしていたが、近所の中村さんの柴犬・クロと遊ぶことが癒やしだった。中村さんが倒れ、後遺症で歩けなくなり、勇太は一時的にクロの面倒を見ることになる。犬を飼うことの難しさを実感し

ながらも、引き取りたいと願ったが、環境が整わず、保護団体を通して新しい飼い主のもとへ送り出す。新生活初日、新しい学校へ向かう道でクロと再会し、新しい飼い主に大切にされている様子に安心する。

この作品は、飼い主に何かあった時の備えの大切さや、飼いたい気持ちだけでは不十分で、適切な環境が必要であることを描き、動物を飼うことの責任と現実を、感情的になりすぎず冷静に伝えている。

また、動物と人間の関係性だけでなく、家族や地域社会のつながりにも触れており、幅広い読者層に共感と理解を促す作品となっている。

「ナミィのはばたき」

藤田くみこ（東京都）

＜受賞理由＞

主人公・チイちゃんは羽化不全で飛べないアゲハチョウを保護し、ナミィと名づける。ナミィに父親の転勤で居場所も友達もない自分の姿を重ね合わせ、不公平で厳しい現実にも嘆きながらも、懸命に生きるナミィの姿から、どの命も誰かのためではなく自分の命を輝かせて生きていると確信し、自分も自分のために勇気を出して前へ飛ぼうと心に誓う。

0.6%という羽化率の低さや生態系の現実を描きながら、身近な蝶を通して自然界の厳しさを考えるきっかけとなる作品である。父親から自然の摂理について聞かされたチイちゃんが「今は目のまえにいるナミィのはなしをしたい」と考える場面は、一つの命への深い愛情と責任感が読む人の胸を打つ。シリアスなテーマを抱えながらも、ファンタジーの要素を取り入れる事で、重みと温かさが調和した、読後感の良い作品である。

「つなぐ、エメラルド」

はるたけ こはね（福島県）

＜受賞理由＞

主人公・文香は、は虫類ショップ「ハチマル」の店長である父を持つが、コーンスネークにかまれたトラウマで、は虫類に触れず悩んでいた。は虫類好きを隠す同級生・莉奈と出会い、は虫類セミナーで莉奈の従姉・晴子とも知り合う。セミナー会場外で起きたイグアナ遺棄事件で父が活躍する姿を見て、文香は、は虫類に触れられない弱さを打ち明ける。励ましを受けて前向きになった文香を見て、莉奈も自分の「好き」と向き合う決意をする。

は虫類という珍しい題材で終生飼養や適正飼養の重要性を丁寧に描いた作品である。苦手意識との向き合い方だけでなく、「好き」をどう大切にしていくかにも焦点が当てられ、「好き」の形には様々なあり方があることに気づかされる。好きを隠さずにいることは、自分を肯定し、人との絆を深め、多様性を受け入れることにも繋がっていくという、動物を通じて人として大切なものに気づかせてくれる作品である。